

編集後記

平成26年は、本校が県立養護学校ひのみね分校からひのみね養護学校となってちょうど30年目になります。この記念すべき年に、「自立活動の授業の充実をめざして～外部専門家を導入した学校全体で取り組む授業改善～」をテーマにした「研究と実践・第12号」をまとめることができたことを、とてもうれしく思います。この「研究と実践」は、自立活動を主として指導する教育課程を履修する児童生徒や医療的ケアを必要とする児童生徒が多数を占める本校の実態から、安心・安全で、確かな自立活動の指導をめざして、平成24年度より学校全体で取り組んできました。

自立活動は、障がいによる学習上又は生活上の困難を改善・克服する教育活動ですが、近年、障がい者の「自立」概念が従前より広い意味で用いられることが多くなってきました。学習指導要領解説自立活動編では「幼児児童生徒がそれぞれの障がいの状態や発達段階等に応じて、主体的に自己の力を可能な限り発揮し、よりよく生きていこうとすることを意味している。」と定義されています。

障がいがどれほど重度であっても、可能な限り児童生徒の主体的な取組を促すとともに、明確な目的を持った活動に高めていく必要があります。自立活動は、児童生徒が自分の力を精一杯発揮し、よりよく生きていこうとする取組を支える教育実践でなければなりません。また、児童生徒の障がいの重症化、多様化、複雑化の傾向は、同時に医療と連携した安心・安全な学習指導や支援のあり方も問われます。

幸い本校は、隣接する徳島赤十字ひのみね総合療育センターとの連携が取りやすい環境にあり、独立以前の分教室・分校時代から様々な支援を受けてきました。本校の55年の歩みは、徳島赤十字ひのみね総合療育センターの協力なしでは考えられません。この恵まれた環境に甘えることなく、自己研鑽し、自立活動のみならず、すべての授業の充実をめざし取り組まなければなりません。

最後になりましたが、外部専門家を活用した各学部の取組、実践事例の報告者、原稿の執筆・編集にあたったすべての教職員の労をねぎらいたいと思います。この取組が、県内の特別支援学校間の連携に役立ち、今後の徳島県の肢体不自由児教育・重症心身障がい児教育が、さらに発展していく一歩となることを願って編集後記といたします。

研 究 同 人 (平成24年度)

川田 人包	谷崎 公治	久保田勝己	中田 聖子
濱田 純代	坂本 美恵	中 史治	高橋 研一
生田 浩二	新居 泰司	大津 京子	一宮 達也
田中 裕仁	落合 六子	四宮美和子	麻植 恵美
平岡 玲子	喜多 兆伸	佐藤 和幸	正見 晃章
宇原 健治	森 ひとみ	武市 三喜	武市 恵子
山下 一夫	福崎 久美	宮本 洋子	濱田三貴子
中村 敏恵	中原ゆかり	宮城 利恵	新井 完
安友 栄二	徳重 有紀	大久保貴子	乾 和彦
林 朱美	増田 良太	藤原 美咲	渡邊 美賀
長田めぐみ	徳本百加里	樋富 恵里	上田 隆幸
岩田 佳代	石岡 恵子	清水 和美	前野 宗孝
一宮 伸匡	貝島 美香	佐藤 友美	玉田 修平
松崎 順子	大岩 和美	古川 良子	岡本絵梨子
岡田真千子	長尾みゆき	八木 真紀	加林 昌子
阿木 裕奈	岡崎 泰子		

研 究 同 人 (平成25年度)

川田 人包	土井 正史	森 好史	中田 聖子
濱田 純代	坂本 美恵	福崎 久美	高橋 研一
生田 浩二	新居 泰司	田中 裕仁	落合 六子
四宮美和子	麻植 恵美	平岡 玲子	喜多 兆伸
佐藤 和幸	宇原 健治	森 ひとみ	武市 恵子
山田 千代	藤本 満理	山下 一夫	中村 敏恵
中原ゆかり	宮城 利恵	新井 完	安友 栄二
徳重 有紀	乾 和彦	宮佐あづみ	林 朱美
増田 良太	藤原 美咲	松島 典子	小西 咲美
川崎 麗	武知 真弓	長田めぐみ	玉田 修平
岡部 淳	松崎 順子	大岩 和美	山ノ井愛子
長尾みゆき	八木 真紀	徳本百加里	古川 良子
一宮 伸匡	久保田 愛	貝島 美香	岡本 香織
児島 悠子	石岡 恵子	前野 宗孝	小部 恋奈
阿木 裕奈	松本 知子	田尾 三恵	樋富 恵里
岡崎 泰子	大坂 玲子	岡田真千子	佐藤 友美
久次米理恵	福岡 順子	藤井 延子	